



都心部に住んでいても、源流である山は私たちの暮らしと密接につながっています。もっと多くの人に源流の山に親んでもらいたいです。

一国内で最も利用者の多い登山地図 GPS アプリ“YAMAP”の開発者である春山社長は、小さい頃から登山をされていたのですか？

私は春日市出身です。いわゆるベッドタウンで育ちました。高校まではスポーツばかりしていました。登山を始めたのは20歳になってからです。登山をはじめとする自然経験は遅い方だと思います。自分の世界が立ち上がりはじめた大学生の頃に、自分の意志で自然経験を積み重ねていったので、自然のすごさや美しさをより強く感じることができました。スポーツとは違い、自然のアクティビティにはマナーはあれどルールはない、競争もない。楽しみ方はその人次第。自由です。これは自然経験の素晴らしいところの一つです。山や自然から教わることが今もたくさんあります。



一登山を始めてから多様な自然経験をされてきた春山社長にとって、福岡市はどのようなまちですか？

福岡市について考える前に、福岡市の位置する九州という島がどのような特性を持っているのかを考える必要があります。九州をひとつの島ととらえて福岡市を見ると、福岡市は九州という島の北側に位置します。大陸の玄関口にあたる場所です。博多湾を含めて特徴的な地形をしていることがわかります。

もう一つ、福岡市の地形の特徴として大きな点は一級河川がないこと。大きな川がなかったため鉱業や製造業とい

った第二次産業よりも、商業やサービス業などの第三次産業が育ちました。現在、福岡市はスタートアップ企業の支援などを積極的にされていますが、福岡市の地形的、文化的影響を受けた取り組みでもあると私は考えています。

一都市における地形の特徴や影響を考えるポイントはなんですか？

『福岡市 新・緑の基本計画』では「骨格」や「拠点」など6つの方向性で整理されていますが、山・川・まち・海を一体的に捉える視点が重要です。参考になるのが、慶應義塾大学名誉教授・岸由二さんが提唱する“流域思考”という考え方です。

“流域思考”とは、足もとの大地を“流域”という地形でとらえ、山・川・まち・海も“流域”という生命圏の一部であるととらえる考え方です。



なぜ“流域”という視点が大切かということ、近年の気候変動によって水との付き合い方が変わってきているからです。ある地域では水不足が起こっている一方で、特に九州では一時期に大雨が降って川が氾濫するようになりました。山・川・まち・海を一体でとらえ、流域全体で、どう水を治め水害を抑えるか、そういう考え方が重要になっています。

また、“流域”の観点に立つと、山で木を伐採すると山の保水力が落ち、川の下流や河口、湾にまで影響を及ぼすことが素直に理解できます。川の下流に住んでいる人にとっても、源流の山は無関係ではなく、自分の生活に直結します。流域の観点を持つことで、山が担う様々な機能に、今以上に注目が集まるでしょう。「まちはまち、山は山」と分断された世界観ではなく、「都心部に住んでいても、源流である山は私たちの暮らしと密接につながっている」という視点を持つことが大切です。

一何かきっかけがあって“流域思考”に行きついたのですか？

川をコンクリートで固める護岸化が進む一方で、源流である山では木を伐採し、鹿の被害もあって下草が育っていない状況を、山登りを通して見続けてきたことが背景にあります。「気候変動に対応した治水を行うためには、川だけの対策では不十分ではないか」と思うようになりました。「川の氾濫を抑えるためには源流である山を育てる必要があるのではないか」「山・川・まち・海を一体でとらえた治水対策が必要なのではないか」と思い、解決の糸口を探していたところ、岸先生の“流域思考”に出会いました。



みなさんの住むまちにも川が流れていると思います。ぜひその川の源流の山に足を運んでもらいたいです。登山を愛好している人だけでなく、もっと多くの人に源流の山に親しんでもらいたい。その思いは、YAMAPを創業した頃からずっと持っています。その思いもあって、YAMAPのアプリでは、百名山だけではなく



地元の人に愛されている身近な低山や里山の地図も掲載しています。地域の山は、私たちの暮らしにとって大切な場所であるという思いがあったからです。

—油山のプロジェクトに関わっておられますが、どのような思いで取り組んでいますか？

これまでの油山は「市民の森」や「もーもーらんど」などのレジャー施設の意味合いが強かったように思います。今回の油山のリニューアルプロジェクトでは、これらの施設を単に「再整備」するのではなく、油山の価値自体を「再定義」する必要があると考えました。なぜなら、流域で考えたとき、油山は福岡市にとって重要な山だからです。

油山は室見川や樋井川の源流の山です。距離的にも心理的にも油山は、福岡市民にとって親しみやすい山です。福岡市には、「海の公園」として海の中道海浜公園があり、「まちの公園」として大濠公園・舞鶴公園など様々な公園があります。油山を「山の公園」として位置づけなおすことで、福岡市は海・まち・山に公園がある、都市と自然のバランスがよい暮らしやすい街という特徴がより際立ちます。また、公園はみんなの広場でもあります。山の公園として油山を位置付けることで福岡市に暮らすみんなで、油山の森をつくっていこう、育てていこうという意識も高まるはずです。福岡市の「一人一花運動」や「都心の森1万本プロジェクト」の取組みの延長として、福岡市で暮らす人たちと一緒に、油山で植樹をし、森をつくるイベントを開催していければと考えています。



—子どもたちに緑の大切さを伝えるにはどのような取組みが効果的ですか？

子どもたちには言葉や文字で概念を教えるよりも、実際に体験してもらう方が効果的です。例えば、子どもと一緒に山に行ってどんぐりを拾い、どんぐりから苗木を育てる。苗木が育ったら、その苗木を持って、山で植樹を行う体験を一緒にしたいです。故郷の山に自分たちで木を植えることで、山との繋がりをより一層感じることが出来ます。成人式のときに植樹した場所を実際に見に行くところまでセットで行ってもおもしろいですよね。30年以上の時間軸で物事がどう移り変わっていくのかを想像する機会を与えてくれるのは、現代社会では植樹事業くらいではないでしょうか。

子どもに限った話ではないですが、AIなどの人工知能が発展していることもあり、知識だ

けではなく感覚や感性がより重要になっています。知識を使いこなせるように感覚や感性を鍛えるためには、やはり自然が最高の教室だと思います。また、自然経験からはみんなで助け合って生きていくことの楽しさや素晴らしさも実感できます。気候変化、環境変化が著しい今、自然や人間以外の生きものからも学ぶことはとても重要だと考えています。



—福岡市にとって今後の“みどりのまちづくり”はどのようにあるべきですか？

山・川・海といった自然資本を、福岡市の都市設計や活力にどのように組み込んでいくかが重要です。水害が社会課題になっている今、川辺の緑をどうするかは興味深いテーマです。河川敷は市民が憩える公園として整備しつつ、増水時の治水機能の役割も持たせるような川の整備、都市設計が今以上に求められます。治水は市民の生活やいのちに直結します。治水の考え方をきちんと組み入れることで市民の納得感も高まります。人が川から離れると水害への危機感も薄れてしまいます。川が暮らしに溶け込むよう、日頃から川に親しむことができるまちづくりが必要ではないでしょうか。

また、森の中に都市があるようなまちづくりも必要です。まちの中にたくさん木々があれば、自然に対しての意識が高まります。緑が多いまちは土地の価値も高まるとも言われています。けやき通りやアクロス山、香椎宮の森、大濠公園など、福岡市には魅力的なみどりの場所がすでに存在します。これらがあることの価値を再定義し、より活かしていくことができれば、福岡市はもっと魅力的なまちになると思います。アジアのリーダー都市をうたう福岡市が目指すべきところは、治水を含めた自然との共生都市、循環型都市をつくっていくことにこそあると私は思っています。

